

図書館実習で学んだこと

村上 穂（文学部文学科日本文学専修）

私は豊島区中央図書館で10日間実習をさせていただいた。本稿では、豊島区立中央図書館の四つの特徴と合わせて、実習で学んだことをお伝えできればと思う。

豊島区立中央図書館の第一の特徴は、豊島区の情報拠点であることだ。豊島区に関する資料のほぼ全てが中央図書館に集められている。「ここに来さえすれば必ず豊島区のことわかる」という信用が図書館の価値を作る、と司書の方が話してくださった。

二つめの特徴は図書館利用に障害がある人へのサービスである。豊島区立中央図書館の資料によると、「図書館利用に障害がある人」とは、心身の障害に限らず何らかの事由によって図書館資料や施設を利用できない、または利用が難しい人々のことを言う。そして「障害者サービス」とはそのような障害となることを図書館側から取り除いていき、利用できるようにすることを言う。豊島区中央図書館には視覚障害者を対象とした「ひかり文庫」、身体的な理由で来館できない高齢者を対象とした「そよかぜ文庫」の2種類のサービスがある。実習ではひかり文庫の業務の一つである「媒体変換」（活字を点字に変換する作業）をさせていただいた。点字を打つのは思った以上に難しく、時間がかかった。点字のルール（長音の「ウ」がないため代わりに「ー」を打つ、「わたしは」→「わたしわ」、「学校へ」→「がっこうえ」、と助詞を書き換える、分かち書きをする、数字の前には数詞を打つ、など）に留意して、一つでも間違えたら最初からやり直すという媒体変換の作業はとても大変だった。私は今まで、すべての図書館がどんな人でも利用できるように体制や設備を整えるべきだと簡単に言っていたが、職員の少ない地域館で媒体変換などの作業を行うことは難しいかもしれないという考えに至った。

三つめの特徴は書架づくりである。豊島区立中央図書館は、豊島区に関する資料とトキワ荘に関する資料の収集に力を入れており、独立したコーナーを設けている。それらは禁帯であるため、来館すれば必ず豊島区とトキワ荘に関する情報が得られるようになっている。また利用者のニーズを汲み、PCの操作やプログラミングに関する資料を他の5類とは別の場所に集め、「PC関連」というコーナーを作っている。大活字本をメインカウンターのそばの目立つ場所に置いていることも私にとっては珍しかった。分類記号順ではない、利用者寄り添った書架づくりをしていて勉強になった。

四つめの特徴は児童向け資料の選書に力を入れていることである。司書の方々が受け入れ候補を全て読んでコメントをし、選書会議での意見交換を経て、最終決定がなされる。ここではルビがない本や対象年齢が不明な本は受け入れないという、かなり明確な基準があった。対象年齢が不明な本とは、画と文のレベルがアンバランスなもの（デフォルメされた画にルビのない解説文が付いている等）である。子どもの成長に応じた資料を提供する、という姿勢が見られた。

普段子どもと接していない立場にあって、子どものためにどんな本を選べばよいかを考えるのは難しい。私たち実習生は、おはなし会のための選書でそのことを体感した。司書さんからのアドバイスは、①季節の本を選ぶ（子どもはあまり季節を意識せずに生活している場合がある。）、②その年齢の理解力に合わせる③色々な文化を知ってもらうため、日本のおはなしと外国のおはなしをバランスよく取り入れる、だった。特に難しかったのは②で、私は2～3歳の子に人間関係の痛みを描いた絵本を読み聞かせてしまい、退屈させてしまった。

おはなし会の後に気づいたことだが、2～3歳の子は仲間外れに接したことや友達とのけんかをあまり経験していないと考えられる。そのため私が選んだ本は年齢に合っていなかったのではないか。何年も子どもと接していない者が「その年齢の理解力」に応じた本を選ぶ際には、その年齢の子の生活を具体的に想像することが本選びのヒントになると思う。

ここまで書いたことはいずれも講義だけではわからなかったことだった。実習で現場に近づくことで、多くの学びを得られた。実習に関わってくださった方々に心よりお礼を申し上げたい。